

街の風景

今年4月5日、タンソンニャット空港に着いたのが23時過ぎ。道路には車と、それより圧倒的に多い数のバイクがあふれていました。ほとんどがスクーターで、おそらく125ccぐらいでしょう。二人乗りも多く、半袖短パン、サンダル履きも珍しくありません。



翌日の日曜日、教頭先生に朝から買い物に連れて行っていただいたのですが、やはり街中はバイクでいっぱいです。しかも多くの交差点が「赤信号でも右折可能(ベトナムは車やバイクは右側通行)」のため、車列の切れ目を待ってはいつまでも道路を渡ることができません。軽く手を挙げつつバイクをすり抜けていく教頭先生の後ろを、ドキドキしながらくっついて歩きました。

ホーチミン生活が2ヶ月ほどになり、バイクや車の運転手の呼吸が少しわかってきて、信号のない横断歩道(運転手には「信号のない横断歩道の手前でバイクや車を停止させる」という発想はなし)を渡る要領と気合いも身についてきました。この間、歩行者として学んだことは

- ◇決心したら迷わない。ためらってはいけない。運転手に目線、「ボクは渡るぞ」と念を送る。
- ◇急な動きは厳禁。「急に走る」「急に止まる」は自殺行為。
- ◇一旦道路に足を踏み出したら、信号が赤になっても慌てない、戻らない、平然と歩ききる。
- ◇「バイクの方から歩行者を避けてくれる」ことを97%信頼して可。3%は？
- ◇バイクに足を踏まれても気にしない。軽くぶつかられても怒らない(実体験)。
- ◇車は別。車は怖い。バスはもっと怖い。避ける気あんのか？
- ◇バスは人にバックミラーをぶつけたぐらいでは謝る気ゼロ。こっちは当たり損(実体験)。
- ◇クラクションの音は「避けてろや!」「殺すぞー」ではなく、「いるよー」「通るよー」の意味。

バイク同士やバイクと車の関係も同様で、みんな「相手をよく見て、相手の挙動を信頼して道路を走っている」ことがよくわかります。渋滞気味の道路で、交差点で、ランアバウトの合流で、サイ



ド・バイ・サイドの駆け引きとテール・トゥー・ノーズの呼吸は1991年F1スペインGPのセナとマンセルのようで見応え抜群です。もし来月「一般人無作為選抜スクーターGP 世界選手権」が緊急開催されて、ベトナム代表が3人乗りお父さんや40代サンダル女性になっちゃっても、ベトナムの表彰台独占は間違いなしです。

「生きる力」について考えた

日本では、ホーチミンのように前を走るバイクの 5 センチ後ろをバスがくっついて走ったり、バイクが歩行者の足を轢いてしまったりすることはありません。歩行者は、車が1台も通らない交差点でも、目の前が赤信号だったら横断歩道の手前でひたすら待つでしょう(たぶん)。

一方で、日本では道路で割り込みされたことに腹を立て背後からあおり運転したり、クラクションを鳴らされたことに逆上して殴りかかりたりする人がニュースになったりします。「自転車が車道を蛇行運転して、車の前にわざと飛び出してきた」などのニュースもありましたが、ホーチミンならそんな自転車がいても運転手がひらりと避けて何事もなかったように走り過ぎるか、ぶつかったとしても「自転車が悪いのだから自業自得」でニュースにならないでしょう(たぶん)。



「割り込み上等お互い様」「とにかく交通をうまく回しましょう」と平然としているホーチミンの運転手と、「あいつは罰せられるべきだ。罰しないとしたら警察がおかしい！」と主張して私刑してしまう日本の運転手。歩行者の動きを瞬時に判断しすりぬけるホーチミンの運転手と、「どうしてそんなところ歩いてるんだ！危ないじゃないか！」と憤る(たまに轢いてしまう)日本の運転手。

もちろんルール・モラル・マナーは今を暮らすためだけのものではなく、見えないどこかや未来のためでもあります。ただ、「ルールを笠に着て同調圧力を押しつけるのはカッコ悪いな」「果たして『生きる力』があるのはどっちだろう？」などと、路面店のバインミー屋さんで順番をガシガシ割り込まれながら考えていました(でも、やっぱり「赤信号は渡っちゃだめ」だと思いますが)。



念のため言っておくと、「ベトナムの人は無法者でひどい人だ」ということではなく、むしろ宗教観が強く、弱者をととても大切にする人たちです。あちこちに仏教やヒンズー教の寺院、キリスト教会があり、いつも老若男女でにぎわっています。老人や子どもや体の不自由な人に声をかけ、かばい、守る姿を日本と同様に目にします。